

峰 万里恵 (うた)

飯泉 昌宏 (ポルトガル・ギター／ギター) 高場 将美 (ギター)

2007.2.17. *Nochero*

<<<<<< I >>>>>>

1. わたしは草の娘 (野に咲く娘)

Sou filha das ervas (ポルトガル)

詞：アマリア・ロドリゲス

曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

わたしはローズマリーをもってきた、薫るジャスミン、心をいやす野の花を。

とある夜明け、バラは枯れ、歌声の葉も落ちた。でも大地が柳の枝に花を咲かせ、わたしに真実の愛をくれた。

わたしは野の草の娘、そのなかで育った。見つかるかぎりの酸っぱい草を、ぜんぶ食べてきた。蟻たちのあとを追っかけて何時間過ごしたことか。わたしは野の草の娘、知ってることはそのくらい。

2. これがファド

Tudo isto é fado (ポルトガル)

詞：アニパウ・ナザレ

曲：フェルナンド・カルヴァーリョ

わたしのご主人になりたいのなら、愛を語るだけでなく、ファドの話もしてください。ファドは、わたしの語っているすべて、さらにまた、わたしの語るができないもの。

たたかいに敗れた魂たち、失われた数々の夜、妖しげな影たち、裏町のならずもの歌、ギターラの涙。……愛と嫉妬、消えた灰と燃える炎、痛みと罪——このすべてが世の中に存在するもの。このすべてが悲しい。このすべてが「ファド」。

この曲にかぎりませんが、ファドということばは、歌のジャンル名であるほかに、「宿命」という意味もかぶせて使われています。

3. ちっちゃなマウムケール

Malmequer pequenino (ポルトガル)

詞：民謡／編・補作アマリア・ロドリゲス

曲：リカルド・ボルジェシュ・デ・ソウザ

“ファド・イダーニャ”

ちっちゃなマウムケールが、ある日きれいなバラに言いました——あんたが女王様にしてもらったからといって、そんなにいぼっていることはないでしょ。

風が揺らすポピーたち、あんたたちを見ていると飽きない。そこにあるのは、いちばん美しいもの。じぶんで知らずに素朴さを守っているということ。

あんたを愛したゆえに、わたしは神様をなくした。あんたの愛ゆえに、じぶんをなくした。いまはひとりぼっちのわたし。神様もなく、愛もなく、あんたもなく。

あの女は罪をおかした。愛ゆえにファドの歌い手になった。あんまり遠くまでファドが彼女を連れてってしまったので、神様も彼女を見失った。

マウムケールは、マリゴールド(金盞花)、黄色の可愛い花です。ポルトガルでは、花びらをむしって恋占いに使うようです。なお、19世紀には、ファドの歌い手(ファディシュタ)は、やくざものと同義語でした。

4. 通りの名前

Nome de rua (ポルトガル)

詞：ダヴィッド・モウラオン＝フェレイラ

曲：アライン・オウウマン

あんたはわたしを通りの名前と呼ぶ、リスボンの、とある通りの名前。人間の名前というより、よく小舟に名づけているような、そんな通りの名前。

静かな通りの名前、そこは夜はだれも通らず、嫉妬が道しるべ、愛が目的地。

秘密の通りの名前、夜はだれも通らない。ここではあの詩人の影が、とつぜんわたしたちを抱きしめる。

5. つかれ

Cansaço (ポルトガル)

詞：ルイシュ・マセード

曲：ジョアキン・カンポシュ “ファド・タンゴ”

鏡の後ろにいるのは誰？ 両目をしっかりわたしの両目にすえている。だれか、このへんを通り過ぎた人、そして勝手に歩きつづけてどこかへ行ってしまった、わたしの目のなかにその人の目を残して。

わたしのベッドで眠っているのは誰？ わたしの夢たちを見ようとしている。だれか、このベッドで死んだ人、そしてあの遠くのほうからわたしを呼んでいる。わたしの夢たちにまざりこんで。

わたしのすること、しないことのすべて。ほかの人たちもそのようにした。そこからくる、わたしのこの疲れ。わたしのすることがみんな、わたしだけでされているのではないと感じて。

6. わたしの愛は海の男 (恋人は船乗り)

Meu amor é marinheiro (ポルトガル)

詞：マヌエウ・アレグレ

曲：アライン・オウウマン

わたしの愛は海の男、海の真ん中に住んでいる。その両腕は風のように、だれも、しぼりつけることができない。

わたしの愛は海の男、わたしのそばへ来ると、口にカーネーションの火をつけて、こんなふうにならう。——わたしは遠く、船たちの通り過ぎるところに住んでいる。でもいつの日か、わたしたちの川の流れに帰ってこよう。砂地の風のように、町々を通り過ぎ、すべての窓を開こう、すべての鎖を解こう。

わたしの愛は海の男。自由な心は、だれにもしぼられない。

7. 黒い船 (暗いはしけ)

Barco negro (ブラジル～ポルトガル)

詞：ダヴィッド・モウラオン＝フェレイラ

曲：カコ・ヴェーリョ & ピラチーニ

朝早く目を覚ましたわたしは、顔がみにくく見えるかとおもった。でもあなたの目は、そうではないと言っていた。わたしの心に太陽が射し込んだ！ ……わたしは見た、岩の上の十字架。あなたの黒い船は光のなかで踊っていた。嵐に吹き飛ばされそうな帆のあいだで、なにかを伝えようと振られていた、あなたの両手。

浜の老女たちは、あなたは帰ってこないという。頭がおかしいんだ！

窓ガラスに砂をぶつける風のなか、歌っている水のなかに、くすぶっている火、寝台のぬくもりのなかに、空っぽの椅子の上に、わたしの胸のなかに——あなたはいつも、わたしといっしょにいる。

<<<<<< II >>>>>>

1. スール (南)

Sur (アルゼンチン)

詞：オメーロ・マンシ

曲：アニーバル・トロイロ

ブエノスアイレスの南の街角、失われた空。——かつては牧草とぬかるみの匂い。20歳のきみがバルコニーで花咲いていた。

南……川の土手、その先は酒場の明かり。もう、店のガラス窓に寄りかかってきみを待っているわたしの姿はない。ふたりの歩みを照らしていた月もない。

過ぎていったことどものノスタルジー、時が運んでいった砂、変わってしまった街の悪夢…すべては死んでしまった。

2. 亜麻の花

Flor de lino (アルゼンチン)

詞：オメーロ・エスポーシト

曲：エクトル・エスタンポーニ

彼女は夜の花びらをむしりながら待っていた、いまわたしが彼女を待っているように、新しい服を着せられた男の子のように、恥ずかしさでいっぱい。……ある日わたしは彼女が花開くを見た、太陽で熟したアルゼンチンの大地の亜麻の花のように。もしわたしが彼女を理解していたら……。不在の花——きみの思い出が、わたしを追いかけてくる。わたしのいつもの孤独の夜に。

ある日、亜麻の花は大草原の彼方へ去っていった。そして、きょう、野は花ざかり。なんといい呪い！ わたしには彼女の愛がない！

3. アルフォンシーナと海

Alfonsina y el mar (アルゼンチン)

詞：フェリクス・ルーブ
曲：アリエール・ラミーレス

海がなめている柔らかい砂の上に、もう帰ってこないあなたの小さな足跡。……「もう少しランプの光を落としてください。わたしを静かに眠らせて。暗い海の底で、貝が子守歌をうたってくれる」

アルフォンシーナ、あなたは自分の孤独を道連れにして行ってしまう。どんな新しい詩を探しにいったのか？ 風と塩の年老いた声が、あなたの魂をこわして運んでゆく。夢のなかのアルフォンシーナ、海の衣をまとって。

アルゼンチンの女性詩人アルフォンシーナ・ストルニは、みずから海に入って、この世を去りました。

4. ノスタルヒアス (郷愁)

Nostalgias (アルゼンチン)

曲：フアン・カルロス・コピアン

アルゼンチン・タンゴの歌曲としてもっとも有名なひとつ。1930年代後半にヒットし、いまもよく歌われています。今夜は飯泉昌宏のギター・ソロでおとどけします。

5. ククルクク・パローマ

Cucurrucucú paloma (メキシコ)

詞 & 曲：トマス・メンデス

言い伝えでは、彼は夜はただ泣いていたそうだ。眠らず、飲んでいた。彼女ゆえに悩み、死ぬときまで彼女の名を呼んでいたそうだ。

1羽の悲しげな鳩が、朝早く、あの見捨てられた家に行って歌う。まだ、あの不実な女の帰りを待ちつづけているのだ。

ククルククー！ 鳩よ、泣くな。石には、愛のことなどわかりはしない。

6. 4人のラバひき男たち

Los cuatro muleros (スペイン)

伝承曲：編・補作フェデリーコ・ガルシーア・ロルカ

川に向かってゆく4人のラバひき男たちのうち、栗毛のラバの人が、わたしの魂を盗む。

野に雨が降っている、わたしの愛が濡れてしまう。わたしは葉っぱがいっぱいの木になりたい、雨宿りの陰をつくってあげたい。

なんのために火を探しに行くの、坂道を登って？ あなたの顔は炎を上げて燃えているのに。

<<<<<< III >>>>>>

1. コインブラ

Coimbra (ポルトガル)

曲：ラウウ・フェラオン

「ポルトガルの4月」という題がつけられ、ムード・ミュージックとして、1950年代に世界的にヒットしたメロディ。ヨーロッパでも最古のひとつである大学があるポルトガルの都市コインブラをうたった曲です。今夜は演奏だけでおとどけします。

2. ポルトガルの家

Uma casa portuguesa (ポルトガル)

詞：ヴァシュコ・デ・マトシュ・セケイラ
レイナウド・フェレイラ

曲：アルトゥール・ヴァシュ・デ・フォンセーカ

ポルトガルの家にはよく似合う、テーブルの上のパンとワイン。もしだれかが、おずおずとドアをノックすれば、その人はみんなといっし

よに食卓につく。貧しいことの喜びは、人に与えることで自分が満足できるという、この大きな財産にある。

素朴な人生、それに加えて、愛とパンとワイン。土鍋で湯気を立てている、あざやかな緑のケールのスープ！

石灰で塗った白壁にかこまれて、ローズマリーの薫り、金色のブドウがひとふさ、庭には2輪のバラ。青タイルに描かれた聖ヨセフ、それに加えて春の太陽。たくさんのキスをもらう約束と、私を待っている両腕。——それがあるのは、ポルトガルの家にかこまれている。きっとそうだ！ポルトガルの家だ。

3. ヴィアナへ行こう

Havemos de ir a Viana (ポルトガル)

詞：ペドロ・オーメン・デ・メロ
曲：アライン・オウウマン

神秘をはらんだ影たちにかこまれて、遠くで星たちがこわれているあいだに、わたしたちのバラを取り替えてしまおう。あとで忘れてしまえるように。

花を胸に抱きしめて出発しよう。愛は風のようなもの。止まると、動きかたがわからなくなって、その場で死んでしまう。

緑色のシガーノ（ポルトガルのロマ、いわゆるジプシー）よ、わたしはこう信じているのだから、そのままにしておいて——おかした罪は20年のこる。罪をおかさなかったことの悔恨は80年。

空想は人をだますけれど、わたしの血は嘘をつかないはず。だから血の命ずるままに、わたしたちはヴィアナへ行かなくてははいけません。いつの日かわたしの愛となるひとよ、わたしたちはヴィアナへ行かねばなりません。

4. セヴェーラのファドふたたび

Novo fado da Severa (ポルトガル)

詞：ジューリオ・ダントシュ
曲：フレデリーコ・デ・フレイタシュ

ラヴェンダーが縁を飾るカペラオン通り。もしわたしの愛する人が朝早く来るのだった

ら、わたしは彼が踏む道の石にキスをする。

わたしの運命は、あなたに会ったときから定まっている。おお、わたしのあこがれのシガーノ、わたしはファドに抱きすがって生きてゆく、あなたと抱き合って死んでゆく。

マリア・セヴェーラは、最初期のファドの女性の歌い手で、1846年にとても若くして亡くなりました。シガーノ(ジプシー女性)だったというのは伝説です。彼女が住んでいたカペラオン通りは、当時は「汚れた通り」と呼ばれる、ファドと売春の街でした。この曲では、すべてが美化されたイメージになっています。

5. 涙

Lágrima (ポルトガル)

詞：アマリア・ロドリゲス
曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして起きるとき、さらに悩みが大きくなっている。

あなたがきれい、わたしはあなたがきれいと言っているのだ。でも夜には、あなたの夢を見る。

いつの日か、あなたに会えないゆえに、絶望のうちに死ぬことを考えたら、わたしは土の上にショールを広げ、そのまままどろんでしまおう。

もしわたしが死んだら、あなたが泣いてくれるとわかったら、あなたのひとしずくの涙のために、どんなにうれしく、わたしは殺してもらおうとすることだろう。



ホームページにぼくの写真も載っています！

<http://mariemine.web.fc2.com>

どうぞよろしく！